

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成24年5月15日現在

機関番号：14301

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2009～2011

課題番号：21520248

研究課題名（和文）ディケンズとアダプテーションに関する考察

研究課題名（英文）A Study of Dickens and Adaptation

研究代表者

佐々木 徹（SASAKI TORU）

京都大学・文学研究科・教授

研究者番号：30170682

研究成果の概要（和文）：収集した資料や、海外出張を利用してのリサーチやレビューをもとにして、ディケンズ作品の映画化という意味でのアダプテーションについては、サリー・レッジャーらとの共著、『チャールズ・ディケンズのコンテクスト』（ケンブリッジ大学出版局）に収録された論考をまとめた。より広い意味でのアダプテーションについては、ディケンズが少年時の靴墨工場での体験をいかに自作の中にアダプトしていくかについての考えを深化することができた。

研究成果の概要（英文）：Taking advantage of the material gathered, and research and review conducted overseas, which were made possible by this fund, I have been able to form my ideas concerning Dickens's cinematic adaptations into an article included in Sally Ledger and Holly Furneaux (eds), *Charles Dickens in Context* (Cambridge University Press). As regards the adaptation conceived in a wider sense, I have been able to deepen my thoughts on the way Dickens continually adapts into his writings his experience at a blacking factory when he was a boy.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2010年度	700,000	210,000	910,000
2011年度	800,000	240,000	1,040,000
年度			
年度			
総計	2,500,000	750,000	3,250,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学、英米・英語圏文学

キーワード：英文学、ディケンズ、アダプテーション、映画、イギリス小説

1. 研究開始当初の背景

本研究は、研究代表者がこれまで科学研究費補助金などにより継続して行っているチャールズ・ディケンズに関する研究の延長線上に位置づけられ、具体的には、「アダプテーション」という観点からディケンズを考察しようとする試みである。

2. 研究の目的

リンダ・ハッチョンの犀利な研究書『アダプテーションの理論』（2006）は、小説から映画への翻案だけではなく、ノヴェライゼーション、グラフィック・ノヴェル、オペラ、ミュージカル、ビデオゲーム、テーマパークに至るまで、広い意味でアダプテーションという文化現象を「インターテクスチュアリティ

の政治学」という視座のもとに捕捉しようとしている。しかし、これはいささか包括的に過ぎて、茫漠とした感がある。対して、本研究はハッチョンらの最新の知見を援用しつつ、アダプテーションなる現象をディケンズという具体例を使って実践的に検討することを目的とする。

ディケンズはアダプテーションの研究には格好の対象である。なぜなら、彼ほどその作品が劇化あるいは映画化された小説家はいないからだ（彼の小説は連載という形態で発表されたため、極端な場合、作品がまだ完結していない時点から早々と海賊版の劇化作品が舞台にのせられた）。また、ディケンズはアダプトされる客体であるだけでなく、その作業の主体でもある。あまり論じられることのない作品だが、『キリスト伝』は新約聖書の福音書のアダプテーションである。あるいは、自作の短編小説「グレイト・ウィングルベリーの決闘」を「謎の紳士」という劇に書き直したり、晩年公開朗読を行った際には殆どの小説を朗読用の台本にアダプトしている。加えて、ハッチョン的な見方を取り入れると、彼は他者による先行テキスト（18世紀のピカレスク小説やシェイクスピアの戯曲）をアダプトしていると言える。いや、それのみならず、自分自身の作品で既に用いたモチーフやプロット・シチュエーションを後にアダプトしている、とも言えるのである。

映画と小説についての研究は既にかんりの歴史を持つのであるが、「視覚的な」文体とは何か、あるいは「映画的な」文体とは何か、それらを構成する言語的要件は何かをしっかりと見定めた論考は未だに出現していない。そこで、ディケンズの文体を分析することにより、手がかりが得られないか、これまでの研究成果を深化させ検討してみたい。彼の文体とその作品の成功したアダプテーションとの関係は、より詳細な研究によって、<雄弁な主観的印象>からテキストに基づいた<確固たる分析>に至る必要がある。

3. 研究の方法

平成 21 年度

研究代表者はサリー・レッジ教授（ロンドン大学）の依頼を受けて、「ディケンズの映画へのアダプテーション」と題する論文を執筆中である。これは同教授が編集してケンブリッジ大学から出版される『チャールズ・ディケンズのコンテクスト』に収録される予定のものである。この論考では 20 世紀の映画化作品を通観した上で、成功したアダプテーションのいくつかを取り上げ、具体的にその成功の原因を分析することになっている。この研究を基礎にして、「視覚的」な文体、あるいは「映画的な」文体について考察する。この時、映画誕生以前の彼らと、映画以後の

モダニズムやヌーボー・ロマンの作家の「映画的」な文体との比較も有用であろう。あるいはまた、「映画的」とはあまり言われないジェイン・オースティンの文体や、そこから生まれた映画も視野に入れ、ディケンズとの比較においてアダプテーションのあり方を検討してみたい。

デイヴィッド・リーンの『オリヴァー・トウィスト』は、おそらくはディケンズの映画化として最も成功したものであろうが、1922年に製作されたロン・チェイニー主演のサイレント版『オリヴァー・トウィスト』はいくつかの点でリーンの映画の工夫を先取りしている。燕雑ではあるものの、サイクスの大の使い方もその一例である。この映画はたまた DVD で観ることができるので、このようなことが確認できるわけであるが、当然ながらそれ以前の映画でどのようなアダプテーションがなされてきたかについても深く知る必要がある。そのために、ロンドンにある英国映画センターに赴き、現存する『オリヴァー・トウィスト』のサイレント映画を調査する。また、やはりロンドンにあるディケンズ博物館において資料を収集する。また、英国に渡航した機会を利用して、ロンドン大学ロイヤル・ホロウェイ・コレッジを訪ね、サリー・レッジ教授のレビューを受ける。

平成 22 年度

エイゼンシュテインがサイレント映画と 19 世紀小説との関係に注目したのに対して、映画と 19 世紀演劇との関係を論じたのがヴァーダックであった。彼によれば、19 世紀に広まった絵画的想像力がメロドラマ演劇を生み、次に映画を引き起こしたのである。このような流れの中に、ディケンズ小説の劇化作品がどう関係するかを調べるため、ボウルトンの『劇化されたディケンズ』（1987）を手がかりにして大英図書館において『オリヴァー・トウィスト』の 19 世紀における上演台本を調査する。

次に、これらとディケンズ自身による劇化、つまり朗読台本との関係を考察する。ディケンズが『オリヴァー・トウィスト』をもとに「サイクスとナンシー」と題した血なまぐさいアダプテーションを構想したのは 1863 年、最初に上演したのが 1869 年のことであった。つまり、コリンズやブラッドンによるセンセーション・ノベルの全盛期である。これらの小説は間違いなくメロドラマ演劇の影響を受けていた。また、ここで興味深いのは、ディケンズが朗読台本を作る際に行った加筆である。ナンシーを殺害した後のサイクスの心理を自由間接話法で描いた文が付け足されたことで、物語の中の出来事がサイクスの視点からとらえられているという印象がより強くなっている。上で触れたリーンの映

像表現もこれと同じ方向性を持っているのである。これが孤立した事実なのか、それとも何らかの兆候であるのか、検討を加えていかねばならない。

『オリヴァー・トウィスト』の劇作台本を英国にて調査する際に、ディケンズ研究の泰斗であると同時に、ダグラス・ジェロルドに関する研究書も著し、ヴィクトリア朝演劇に詳しいロンドン大学名誉教授マイケル・スレイターのレビューを受ける予定である。

平成 23 年度

「アダプテーションの主体としてのディケンズ」について、ディケンズが『オリヴァー・トウィスト』におけるモチーフをいかにアダプトしていくかを考える。第 18 章で、主人公がフェイギンのアジトの屋根裏から隣の家の屋根を眺める時、彼の眼に映るもの一つに「黒くなった煙突」がある。そして、そのわずか数頁の後、我々はフェイギンがオリヴァーを悪の道に誘い込み、「彼の魂を黒く塗ろう」と企んでいると知らされる。ここにはディケンズの靴墨工場の記憶が潜んでいるに違いない。その『オリヴァー・トウィスト』の次に書かれた『ニコラス・ニクルビー』第 40 章に、本筋とは何の関係もない無名の少年が一場面のみ登場する。彼は足が悪く外に出られないので、屋根裏にある自分の部屋から「暗い家々の屋根」をじっと眺めて時を過ごしている。唯一の楽しみは窓の外に置いた花の世話であり、その花は「靴墨の瓶」に活かられている。〈屋根裏〉〈屋根〉〈靴墨〉のモチーフから、この少年はオリヴァーをアダプトしたものだと見て間違いあるまい。

アダプテーションをこのような角度から考えると、ディケンズの想像力の系譜を作成することが可能となるはずだ（ちなみに、上で示したような『ニコラス・ニクルビー』の無名の子供にまつわる系譜について考察を加えた研究は今までにない）。エドモンド・ウィルソンが明らかにしたように、靴墨工場での経験はディケンズにとって決定的な意味を持った。結果として彼はその記憶にまつわる物語を執拗にアダプトするのである。

上記の作業を行うと同時に、3 年間の研究の総合的な成果をまとめる。国内の学会や、国際ディケンズ・フェロウシップなどの国際学会での発表を行う。

4. 研究成果

デイヴィッド・リーン監督の映画、『大いなる遺産』には原作とは異なる、興味深い場面がいくつかある。エステラとドラムルを結婚させるつもりだというミス・ハヴィンシャムの言に、ピップは失望して部屋を去る。彼は出て行った後ドアを閉める。暖炉から火のついた石炭が転がり、彼女のドレスに火がつく。

このフィルム編集だと、あたかもピップが意図的ではないにせよ彼女を死に至らしめたように見える。ディケンズのテキストは、かつてモイナハン(1960)が指摘したような、ミス・ハヴィンシャムに対する攻撃的な感情をピップが持っているとは言っていない。しかしこれは可能性としてはあり得ることで、それを抽出したリーンの映画はピップとミス・ハヴィンシャムの関係に興味深い光を当てている。あるいはミス・ハヴィンシャムのエステラに対する支配力の強さが強調されるエンディングも注目に値する。ピップがサティス・ハウスを訪れると、ドラムルとの結婚話がつぶれたエステラがミス・ハヴィンシャムの部屋にいて彼女の椅子に座り、すっかりその後を継いで世捨て人を決め込もうとしている。そのエステラに対し、ピップはこの家は死んだ家だと言い、「僕は戻ってきましたよ、ミス・ハヴィンシャム！」と叫びながら家のカーテンを引き剥がして、太陽の光を入れる（原作の第 29 章の初めに、ピップがこの屋敷に光を入れるという未来を思い描く場面がある）。陳腐な演出とも見えようが、これは、マグウィッチの死後ピップが病気になる、ついに昏倒するところで画面を暗転にし、やがて徐々に明かりが差してジョーの顔が見えることでピップの再生を表現する映像処理と呼応しているとも考えられる。アダプテーションとはこのように創造的な過程であり、決して原作を模倣する二次的な行為ではない。リーン監督の映画の意義やアダプテーションに関する見解を、ケンブリッジ大学から出版された本の中で、国際的なかたちで世に問うことができたのは大きな収穫と言えるだろう。

また、アダプテーションを行う主体としてのディケンズについては、現在、彼の靴墨工場体験についての論考をまとめているところであり、これは 2012 年 5 月末に行われる日本英文学会において日本語で発表し、それを深化させたものを英語で 8 月に行われる国際ディケンズ・フェロウシップ大会で発表する予定である。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 4 件）

- ① 佐々木徹、オースティンとディケンズ、ジェイン・オースティン研究、査読無、第 5 号、2011、pp.1-20
- ② 佐々木徹、Translating Great Expectations into Japanese、The Dickensian、査読有、Vol. 107、Part 3、2011、pp. 197-201

〔学会発表〕（計 4 件）

- ① 佐々木徹、『大いなる遺産』について、
ディケンズ・フェロウシップ日本支部秋季総
会、2011年
- ② 佐々木徹、推理小説の伝統とフォークナ
ー、日本フォークナー協会年次大会、2010年

〔図書〕(計2件)

- ① 佐々木徹、ほか、Cambridge University
Press、Charles Dickens in Context、2011、405
- ② 佐々木徹訳、河出文庫、ディケンズ著『大
いなる遺産』、2011年、上巻415、下巻411

6. 研究組織

(1) 研究代表者

佐々木 徹 (SASAKI TORU)
京都大学・文学研究科・教授
研究者番号：30170682

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：